

題 目 **A Study on Interactive Writing Instruction for Japanese EFL Learners**

(日本人英語学習者を対象にした Interactive Writing Instruction に関する研究)

本論文は、そもそも筆者が 2007 年度に高校生が書いた英作文を見るという機会に恵まれ、そこから量的にも質的にも改善する余地が多くあると感じ、修士論文のテーマから継続して行っている研究である。本研究の目的は top-down instruction と bottom-up instruction を融合したライティング指導 Interactive Writing Instruction を実践し、その有効性を検証することである。

第 2 章では、これまで世界で行われてきた第二言語教育/外国語教育の歴史を 3 つのステージに分けて概観し、その 3 つのステージにおける教授法の移行の理由を考える。さらにそれら 3 つの各教授法におけるライティングの位置づけを確認する。

第 3 章では、日本の外国語教育、とりわけ英語教育を歴史とともに概観し、戦後の学習指導要領の変遷と、さらにライティング指導の位置づけの変遷を概観する。そして、最新の学習指導要領におけるライティング (英語表現 I/II) の目標と、筆者が過去に行った高校生の英作文の分析結果とを比較することで、学習指導要領における英語表現 I/II と高校生の英作文の現実との乖離を把握する。

第 4 章では、Interactive Writing Instruction の理論的背景を説明する。そもそも本研究の主軸である Interactive Writing Instruction は Grave(1988)が唱えた Interactive (Reading) Approach のモデルと Raimes (1983)が示した英作文に必要な要素、この 2 つのモデルを発想の基盤としている。この指導法の独自性は、top-down instruction と bottom-up instruction を融合したライティング指導、特に、top-down instruction と bottom-up instruction の間につながりをもたせることを主眼とした部分にみられる。次章からは top-down instruction と bottom-up instruction の検証、さらに Interactive Writing Instruction の検証となる。

第 5 章 (Research I) においては、top-down instruction の実証研究である。何を書いてよいか分からないという高校生の問題を解消すべく、コンセプト・マッピングを活用した実験的英語ライティング指導を実施した。その結果、指導の対象となった高校生の自由英作文に量的改善な改善はわずかに総語数の増加でみられたが、その一方で、非文法的な英文も多く産出され、質的な改善はさほど見られなかった (Fukushima & Ito, 2009 ; 伊東他, 2009)。つまり、生徒の言いたい内容が適切に伝わっていない英文が多々見かけられた。特に、"Mobile phone is many kinds."や"Mobile phone can listen to music."のように、主題型言語である日本語 (毛利, 1980) の影響を受けて、主語の選択を誤ったがために、非文法的な英文となってしまったケースが多く見られた (福島, 2010)。

第 6 章では、日本人高校生が本当に主題型言語である日本語の主題を主語型言語である英語の主語においてしまう傾向があるのかを検証するために調査を行った。調査に使用した英文は「A は B だ。」「A は B が C だ。」という日本語の構文を使用した。その調査結果から、日本語の主題を英語の主語において英文を作成するとその英文の文法性は下がる傾向にあることが判明した。加えて、人物や動物を主語においた場合は英文の文法性は上がる傾向にあることが判明した。

第 7 章では、前章の結果を基に、特に主語の選択に留意させるための bottom-up instruction の実証研究である。特に中間日本語を活用した和文英訳指導を基軸とした実験的ライティング指導を行った。その結果、整序問題から成る事前テストと事後テストの間で英文の文法性において改善が確認された (伊東他, 2010)。

第 8 章では、第 5 章から第 7 章で実施した実験的ライティング指導を基にコンセプト・マッピングを基軸とした top-down instruction と中間日本語を活用したキーワード英作文を基軸とした bottom-up instruction を融合した Interactive Writing Instruction の実験授業を実施した。

研究の対象は2グループである。実験群にはInteractive Writing Instructionを、統制群にはコンセプト・マッピングを基軸としたtop-down instructionのみを1ヶ月間実施した。実験授業は、通常の英語ライティング授業の開始20分間を利用し、それぞれ8回の実験授業においては、4つのテーマを設定した。この実験授業の結果、事前テストと事後テストの間に実験群は英作文の量・英文の文法性ともに改善が見られた。一方、統制群のほうは英作文の量の改善は見られたものの、英文の文法性の向上は見られなかった。よって、Interactive Writing Instructionの有効性がある程度は確認できたが、しかし実験群と統制群の伸びの間に統計的に有意な差は確認されなかった。よって、追実験を試みることにした。

第9章では、前章の課題をもとに指導の回数を増やした追実験がなされた。実験の内容はほぼ前章と同じとし、研究の対象は2グループである。実験群にはInteractive Writing Instructionを、統制群にはコンセプト・マッピングを基軸としたtop-down instructionのみを約2ヶ月間実施した。実験授業は、通常の英語ライティング授業の開始20分間を利用し回、それぞれ12回の実験授業においては、6つのテーマを設定した。この実験授業の結果、事前テストと事後テストの間に実験群は英作文の量はわずかに増加したが、英文の文法性に大きく改善が見られた。一方、統制群のほうは英作文の量は大幅に改善が見られたものの、英文の文法性の改善はほとんど見られなかった。よって、前章での実験と同様にその分析の結果、Interactive Writing Instructionの有効性がある程度は確認できた。しかしながら、統計的に有意な差は確認されなかった。その理由について様々な角度から考察を加えた。

第10章では、本研究をまとめ、その課題と実験の限界を明らかにし、今後の課題に言及し結論とした。